

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「多様性の包摶（あるものを包み込んで取り組む）とは」

昨年9月、中央教育審議会教育課程企画特別部会において次期学習指導要領の「論点整理」がまとまり、全体の柱として「多様性の包摶（Equity）」が掲げられた。教育そのものの在り方を多様性の包摶を土台に据えていくというメッセージであり、全ての子どもたちが多様であることを前提とし、多様な他者と共生するための方法を日常の生活の中で学んでいく学校教育へと変わろうとしている。

(参照：特別支援教育研究2026. 1月号)

【多様性の包摶を土台に据えた学校づくりのポイント】

1 「社会モデル」の視点で、学校の当たり前を変える

社会モデルとは、障害や不利益・困難の原因は個人の障害そのものにあるのではなく、障害のない人を前提に作られた社会の仕組みに原因があるという考え方。一方、個人モデルとは、障害や不利益・困難の原因は目が見えない、足が動かせないなど、個人の障害そのものが原因であるという考え方。

学校では、社会モデルの視点をもちながら、既存の環境、授業、ルール等を多様な子どもがいることを踏まえて変えていく。例えば、授業においては、導入の工夫で意欲や集中を高めて見通しを示す、何を学ぶかを明確にする（焦点化）、指示・発問・説明を工夫する（前置きして指示を出す・指示を短く・声のトーンや話のスピードを変化させる等）、視覚的な情報を提示する（ICTの活用・板書の工夫・タイマーの活用・思考の視覚化等）、ユニバーサルデザインの視点による授業づくりを当たり前にする。その上で「うまくいかない」子どもに対して、自分の力を発揮して課題を遂行できる支援を工夫する（複数のプリントの用意、ワークシートやヒントカードの用意、課題の調整等）、個別の指示を出す、支援員を配置するなどの合理的な配慮を行う。「うまくいかない」理由を子どもの特性に求めるのではなく、今の「当たり前」を見直す。



2 全ての子どもたちの声に耳を傾ける

Q：「4人の子どもに3個のりんごを分けるために、あなたはどうしますか？」

一般的には、1個のりんごを4等分して12個にした上で1人に3個ずつ分けると考える。しかし、4人の中には、りんごが嫌いな子どもがいるかもしれない、お腹がいっぱいな子どもがいるかもしれない。一番よい方法は、子どもに聞くことではないか。

「Nothing about us, without us（私たち抜きに私たちのことを決めないで）」というスローガンは、障害者権利条約において障害当事者が掲げたものである。これは「障害のある子ども」だけでなく、全ての子どもに当てはまる。「自分はこう学びたい」「この活動は苦しい」など、全ての子どもの声に耳を傾けるべきである。その声を可視化することで、子どもの多様性に応えていくことができる。



とれたて直送便



「保護者の声にも耳を傾ける」

保護者が学校や子どもについて普段思っていること、感じていることに耳を傾ける。貧困を含め、様々な背景の家庭が増えているので、親が子どもに対して時間が取れていらない状況があっても、決して手を抜いているのではない、怠けているのではないという視点をもつ。忙しい保護者は、アドバイスより「分かってほしい」と感じている。「子どもが寂しがっている=親の愛情不足」と単純に考えるのではなく、保護者の置かれている状況を正しく理解してどうすべきかと一緒に考える姿勢が大切である。